デジタル時代におけるモノクロ写真　　（出典　　『写真のネタ帳』）

　さてこのデジタルのご時勢。

モノクロ写真は、画像のデジタル処理やカメラの設定によって、簡単に手に入ります。

また、ライカからはモノクロ専用のデジカメなんてものもリリースされています。さすがはライカです。

　しかし、デジカメで撮った画像をただモノクロに変換しても、それはただの「色の無い写真」でしかありません。

たとえば、アートとしてのモノクロ写真は、アナログのプロセスによって得られるものが重要な役割を演じます。

たとえばフィルムの粒子感や諧調の出かた、それからバライタペーパーの紙そのものの質感や、乳剤だからこその諧調や質感。

そういったものも含めて「アート」なのです。ただ白と黒であればいいというわけではありません。

　また、ノスタルジーな雰囲気も、そこにノスタルジーなものが写っているからこそノスタルジーであると言えます。

「今現在」を写しても、そこに写っているのはやはり「今現在」であって、よく考えてみたらそこにノスタルジーである理由は存在しません。

　このように、ただ「なんとなく」だけでモノクロ写真を撮ってしまうと、その表現は根拠の無い弱いものになってしまいます。

モノクロ写真を操り、自由にその表現を楽しむには、その「特徴」と「魅力」を知り、それを生かした撮影をする必要があります。

　モノクロは「説明」ではなく「ニュアンス」なのです。

断言するのではなく、「におわせる」のです。だから見る人はその意味を忖度するしかなく、そうやって写真に引き込まれざるを得なくなるわけです。

逆に見る人に忖度をあきらめさせてしまっては、モノクロ写真は成立し得ません。

モノクロをやるからには、見る人を引き込まなくてはいけません。

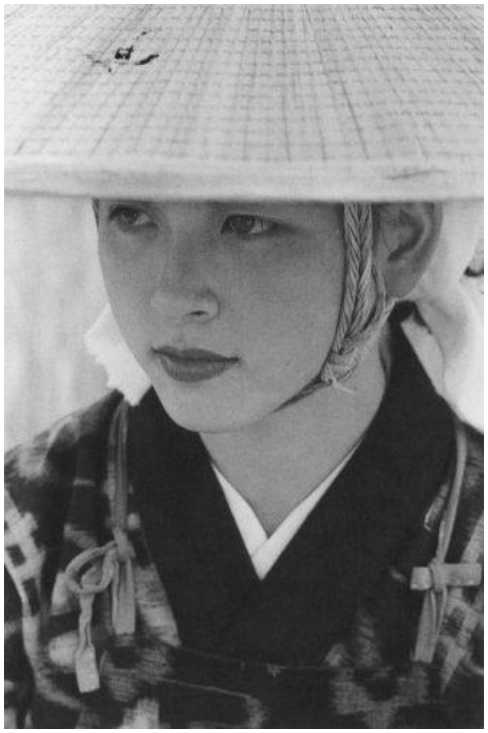
植田正治という写真家がいますが、彼の写真の醍醐味は、その「配置」です。

モノクロであるとそれがストレートに伝わってきます。

モノクロであるがゆえに写真が抽象化され、フォルム自体にストレートに目が行きます。

もしこれがカラーだったら、具体的すぎて興ざめでしょう。

モノクロであれば「シュールな世界観」ですが、カラーだったら「なにやってんのこの人たち？」になりかねません。



これは 写真家 木村伊兵衛の代表作 秋田美人のアイコン的写真ですね。

眼差しと造形美にストレートに目が行き、「美人」を見事に抽象化しています。
モノクロによって情報を省略化するからこそ、「美人」そのものが浮かび上がってくるのです。
これがカラーであればただの美人の写真ですが、モノクロであることによって、アイコンの域にまで昇華されています。
　モノクロは「説明」ではなく「ニュアンス」なのです。
断言するのではなく、「におわせる」のです。だから見る人はその意味を忖度するしかなく、そうやって写真に引き込まれざるを得なくなるわけです。
逆に見る人に忖度をあきらめさせてしまっては、モノクロ写真は成立し得ません。
モノクロをやるからには、見る人を引き込まなくてはいけません。
見る人にイマジネーションを広げてもらうための「省略」であり、そのためのモノクロなのです。

　さてその省略ですが、この写真では、印象の大きな要素となる、「髪型」が省略されていますね。
顔の造作「だけ」を見せることによって巧妙に具体化を避け、被写体を抽象化しています。
細部を描写することによって、より、印象が「決められて」しまいますが、省くことによって、「決めない」のです。
「決めない」から終わらない。つまり、いつまでもこの写真に引きつけられ続けるのです。
省略の美学とモノクロは良くマッチします。

さてこの写真の巧妙な点はまだ続きます。
まず、髪型を隠すための笠は、同時に土地感を演出するための小道具でもあります。
なおかつその笠のラインを目の上ぎりぎりに配置することによって、より目ヂカラを強調しています。
さらにその目線も、引きつけた上で外すことによって見る人を永遠に忖度させる要素となっています。

目線が見る人と合っていると「行って戻って」、で終わりですが、外れていると「行って→行って」、そのまま帰ってきません。
そうやってまた、見る人との間に、終わらない関係を築いているのです。

つぎにモノクロの諧調について。
この写真は、その笠の陰によって、顔を単純に白にするのではなく、グレーで描いています。
ふつう女性の顔といえば、真っ白く飛ばしてしまいたくなるものですが、そうすると目立たせることはできますが、ニュアンスを描くことはできません。
白でもなく黒でもなくグレーは、階調が最もゆたかに表現される領域であり、微妙なニュアンスを表現しやすいのです。

「オツなもんです」「粋なもんです」が口ぐせの、木村らしい女性の描き方です。
なおかつそのグレー域を、笠の白と着物の黒で挟み込むことによってしっかりと分離しています。
また、着物の黒からそのままの流れでグレーとはならず、その間の半衿の白が強いコントラストを放って、画面を引き締めています。
これによって、だらりとしたグレー面という印象を救い、溌剌とした若々しさも演出します。
これらを雪曇りのような秋田らしい寒そうな印象でまとめていますが、実際は 8 月の晴天下にグリーンのフィルターを入れて撮影したといいますから、確信犯です。
木村伊兵衛の撮影が「名人芸」と言われるゆえんでしょう。
省略と抽象化、モノクロの諧調とその面の配置。
モノクロ写真のいろいろな面白さが、この写真には詰まっています。

まとめ
名人には名人たるゆえんがあり、たまたまその時代にモノクロしかなかったからという、消極的な理由によって作品が成立しているわけではありません。

モノクロにはモノクロなりの積極的な意味と価値があるのです。
それを理解して使いこなすことこそが、このデジタル時代には意味のあることです。

モノクロ ＝ 抽象的 ＝ 非実用的 ＝ アート

カラー画像から単純に色を抜いただけでは、ただの色の無い画像であり、「モノクロ写真」にはモノクロならではの発想が重要。
それは、色が無いゆえに、まず形に目がいくということ。
だから、「ものそのもの」や「ものごとそのもの」を際立たせる性質がある、ということです。
ものの存在感そのもの、または出来事そのものにせまりたい時は有効。
それから、モノクロは色を省いた「濃淡」だけの世界、つまり、省略の美学。
それは短歌や俳句、または能の世界にも例えられます。
いかに少ない情報でいかに豊かな世界を見せられるか。
これがモノクロ写真の一つの挑戦。

グレーの豊かな諧調さえも敢えて省いて、
ものの佇まいそのものをより強調することもできますし、
被写体そのものの省略と連動させることもできます。

日本人の感性ですね